研究課題　中世におけるトカラ・奄美・琉球関係史料の学際的研究

研究経費　五〇万円

研究組織

　研究代表者　　　村木二郎（国立歴史民俗博物館）

　所内共同研究者　黒嶋敏

　所外共同研究者　荒木和憲（国立歴史民俗博物館）・田中大喜（国立歴史民俗博物館）・鈴木康之（県立広島大学）・池谷初恵（伊豆の国市教育委員会）

研究の概要

（１）課題の概要

　九州島と沖縄島に挟まれたトカラ・奄美の島々は、中世を通じて独特の歴史を有する境界領域であった。中世前半は日本の最西端と位置付けられ、南九州の勢力の影響を受けた。一四世紀後半以降は、明の冊封を受けた琉球が勢力を拡大して周辺諸島を軍事的に侵攻したため、奄美はその領域内に併呑され、トカラは日本と琉球に両属するような様相を呈する。  
ただし、石上英一編『奄美諸島編年史料』のような網羅的な史料蒐集が行われたにもかかわらず同時代の文献史料は限定的であり、未解明な部分がまだまだ多い。しかし近年、喜界島などで中世集落遺跡が相次いで発掘調査されるようになり、遺跡の消長や陶磁器の流通を追うことで、考古学的に解明することが可能となりつつある。  
そこで本研究では、中世のトカラ・奄美にフィールドを設定し、日本・琉球が及ぼした影響について、考古学・文献史学それぞれの視点から学際的に検討を進めていく。考古学の研究者は現地調査を主とした集落遺跡の検討を、文献史学の研究者は史料編纂所が所蔵する関連資料の原本調査と高精細デジタル撮影を主とした比較・解析を実施する。そして双方の研究成果をもとに議論し、成果を公開して「史資料の研究資源化」を行う。

（２）研究の成果

　史料編纂所所蔵島津家文書の①嘉禄三年藤原頼経袖判下文、②延文元年足利義詮袖判下文、③貞治二年島津道鑑譲状案を、鹿児島県出水郡長島町在住の個人所蔵資料である千竃文書とあわせることで、中世のトカラ（「五島・七島」）・喜界島や奄美大島を含めた南西諸島に関する文献史料による情報を整理した。ここから南九州の武士団が奄美を含めた領域をどのように認識していたかがわかる。さらに近年の発掘調査によって著しい成果を挙げつつある奄美地域の考古学的成果として、喜界島城久遺跡群大ウフ遺跡、同手久津久遺跡群中増遺跡、与論島与論城跡出土の陶磁器データと比較した。これらの遺跡は集落遺跡であり、陶磁器の分析によって集落の消長がわかる。その成果からは、一三～一四世紀代の南九州の武士団による影響と、一五世紀中頃の琉球による影響とでは、在地に与えたインパクトは著しく異なるということがわかった。すなわち、前者からは集落遺跡における変化は見られず、文献史料に書かれた事実は専ら表面的な現象であった。それに対して後者は集落を改変、消滅させるにいたる地域社会を根本的に変える事態であった。文献史学の研究者と考古学の研究者が同じ対象を見据えて取り組んだことから導いた成果であり、今後のさらなる学際的研究を促すものであろう。  
　しかし、今年度は新型コロナウィルスの感染拡大に伴う研究活動の停滞と行動制限のなかで、調査先が医療資源に乏しい島嶼部であるため、当初予定していた調査を完遂することができなかった。そのため研究費三四万四七四〇円は返金することとした。